

## 博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成25年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	グローバル安全学トップ リーダー育成プログラム	申請大学名	東北大学
申請大学長名	里見 進		
プログラム責任者	花輪 公雄		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本プログラムの中心的な推進者によってなされた説明や質疑・応答において、意欲・情熱が感じられ、事前に申請した所要の体制整備等がほぼ順調に推進されている。実施計画についても、研修及び講義環境の整備等において一部遅延が認められ、学生定員充足率の向上努力も必要ながら、全体的には計画通り実施されている。</li> <li>・コースワークについては、関係者（学生、プログラム教員、プログラムに直接参加していない教員）間の相互理解が、必ずしも十分とは言い難い面がある。</li> <li>・大学院生はグローバル安全学教育研究センターに配属され、専門分野の枠を超えたコースワークを行っているが、博士課程教育リーディングプログラムの特徴が必ずしも理解されておらず、まだ手探り状態の感がある。</li> <li>・教員、メンター等の指導支援体制が形式上は順調に構築、運営され始めているようであるが、実際には、学位プログラムの内容の理解について学生とのコミュニケーションが不足していると感じられた。</li> <li>・本プログラムと災害科学国際研究所との関係や、産業界との連携の将来イメージが未だ不明確である。</li> <li>・海外の研究協力者及び海外滞在経験教員の教育実績が明らかではなく、将来、国際的に通用する学生の研究指導とどのように関係するかが明確ではない。</li> <li>・面談した複数学生からは、多くの領域を横断的に学習することが可能で、期待が大きいとのコメントがあり、通常の大学院教育とは異なる本プログラムに満足している様子であった。しかし、一方では、プログラムの全体像がよく理解できておらず、不安を感じている学生もおり、その原因の一端は、プログラムに参加している教員の理解不足にあると判断された。</li> </ul> <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本プログラムの中核的研究拠点である災害科学国際研究所は、発足してまだ日が浅く、学際融合型の研究実績は未だ不十分である。そのことが学生指導における実践性の欠如となって現れており、各関係教員の一層の研究・教育努力が求められる。</li> <li>・本プログラムの最終成果が優秀な人材育成、輩出であることを考慮すると、本プログラム計画推進の効果（評価）は学生側の成長（具体活動・学力向上）と連動させながら検討すべきであろう。しかし、現状では、学生側へのモニタリング体制が不十分であり、その効果が見えにくくなっている。</li> </ul>			

- ・「安全安心を知る」、「安全安心を創る」、「安全安心に生きる」の三者間の具体的な連携が曖昧であり、各分野を専門的に学習するだけでなく、複雑な問題に対して、総合的にまちづくり、地域づくり、国づくりができるリーダーを育成する教育プログラムになるよう、カリキュラムの再検討が望まれる。現状では、各教員の得意分野を講義し、断片的な知識を多数詰め込むような印象となっている。特に、全員が共通して履修するコアプログラムの充実が望まれる。
- ・複合災害に対する「実践的防災学」を新たに立ち上げているが、内容的には自然災害の理解が中心で、自然災害や産業災害の対策、災害マネジメント、経済復興、地域で暮らす人々の生活再建、成熟社会への過程、社会リスクの認知等に関する分野が相対的に不十分である。適切な教職員の配置や必要に応じて他大学、外部機関等との連携を行い、本プログラムの趣旨に則った教育を展開するよう検討が望まれる。
- ・優秀な学生確保のための広報活動が不足しており、関連教員の研究室以外への全学的な周知が不足している。特に、海外からの学生確保の手段として、これまでの COE 等の実績を活用するとしているが、具体的にどの程度集められるか、不安がある。
- ・専門の異なる学生間で切磋琢磨しあう環境としてのスペースは準備されているが、現状ではそこを利用する時間が少ない。学生がそこで、主体的に議論しあう十分な時間の確保ができるような工夫が必要である。
- ・本プログラムでは、学生の研究・学会活動に対する経費支弁が可能となっているが、必ずしもそのことが関係教員や学生間で共通に認識されていないきらいがある。したがって、それが噂となって、学生募集などに際して不安材料になりかねないので、誤解が生じないように注意する必要がある。
- ・7年間のリーディングプログラムの支援期間終了後に大学がどのように変革しうるのか、また、本プログラムはどのように継承されていくのか、明快な見通しが必要である。
- ・本プログラムに参加し修了した学生が、10年後、20年後にも連携を保ちつつ、世界で活躍できるような連絡組織、同窓会組織の設立を大学で支援してはどうか。